

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 辰巳 智則

論 文 題 目

負傷競技者のスポーツ傷害受容に関する研究

論文審査担当者

主 査

名古屋大学総合保健体育科学センター教授 竹之内隆志

名古屋大学総合保健体育科学センター教授 山本 裕二

名古屋大学総合保健体育科学センター教授 蛭田 秀一

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

スポーツ傷害は、アスリートの身体のみならず心をも傷つける重大な出来事である。本論文は、そうした負傷アスリートの心の回復やリハビリテーションへの専心性に関わる中核的要因として「スポーツ傷害受容」に着目し、受容の構造や受容に影響する変数を検討し、負傷アスリートへの心理支援に関する示唆を得ることを目的としたものである。

第1章では、先行研究を概観し、「スポーツ傷害受容」の定義の曖昧さや研究遂行上の問題点を指摘した。そして、スポーツ傷害受容を「負傷アスリートがスポーツ傷害の過酷さを認識しながらも、気持ちの折り合いをつけ、状況を克服するために今やるべきことは何か、先にやるべきことは何であるのかを自ら見出だし、対処していこうとする心理状態」と定義した。また、ソーシャル・サポートと情動調整行動を受容の調節変数として取り上げることについて、競技スポーツの社会的・文化的側面を踏まえて説明し、本論文の目的を述べた。

第2章では、スポーツ傷害受容の構造を検討するために、元負傷アスリート4名を対象に、受傷からリハビリテーション、競技復帰に至るプロセスについての面接を行った。その結果、「脱執心的対処：負傷がもたらす負の影響への執着から脱することを可能にした心性」の観点がスポーツ傷害受容の基軸となり、これに先行して「情緒的安定性」と「時間的展望」及び「所属運動部一体感」といった心理社会的回復の観点が認められることが示唆された【研究Ⅰ】。次に、脱執心的対処の観点からスポーツ傷害受容尺度を作成し、因子を検討した結果、スポーツ傷害受容が「現状随順性：負傷の現状に折り合いがつけられている心性」と「自己努力における意図性：自らが行う対処努力に一貫した意図が備えられている心性」の2因子からなることが明らかになり、さらに、尺度の信頼性と妥当性を確認した【研究Ⅱ】。

第3章では、スポーツ傷害受容、リハビリテーション専心性・成果認知度と競技復帰後の適応との関連を検討した。その結果、競技復帰後の適応が良好なアスリートはそうでないアスリートよりも、リハビリテーション期のスポーツ傷害受容やリハビリテーション専心性・成果認知度が高いことが明らかになった。この結果は、スポーツ傷害受容がリハビリテーションのみならず、競技復帰後の適応状態にも影響することを示唆することから、負傷アスリートの心理支援において、スポーツ傷害受容を方向目標とすることは妥当であると考えられた【研究Ⅲ】。

第4章では、第2章【研究Ⅰ，Ⅱ】の結果を踏まえ、スポーツ傷害受容を促進させる「心理社会的回復要因」を検討した。その結果、特に「情緒的安定性」と「時間的展望」がスポーツ傷害受容の促進要因であることが明らかになり、このような影響過程を「スポーツ傷害受容の心理プロセス」と命名した。また、この結果より、情緒的安定性の回復を意図した「情緒的支援」や時間的展望の回復を意図した「見通し支援」がスポーツ

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

傷害受容に有効であることが示唆された【研究Ⅳ】。

第5章では、重要な他者による「ソーシャル・サポート」と負傷アスリートの「情動調整行動」を取り上げ、「スポーツ傷害受容の心理プロセス」との関連を量的に検討した。その結果、ソーシャル・サポートの認知度が高い負傷アスリートは、陰性情動を表出することで、情緒的安定性を回復させ、受容を促進させている一方で、ソーシャル・サポートの認知度が低い負傷アスリートは、陰性情動の表出を抑制することで、情緒的安定性を低下させ、受容を阻害させていることなどが明らかになった。これらの結果から、サポート認知度の違いにより、行使される情動調整行動とスポーツ傷害受容の心理プロセスのパターンが異なることが示唆された【研究Ⅴ】。引き続き、元負傷アスリート1名を対象に面接を実施し、負傷から競技復帰へと至る間のこれらの変数間の関連の時系列的変化を質的に検討した結果、変数間の双方向の因果的作用を認めるとともに、時期の違いにより、受容に影響する情動調整行動が異なることも明らかになった。このことから、時期と情動調整行動の質を加味した支援が有効であることが示唆された【研究Ⅵ】。

第6章では、本論文の総括的な結論を述べた上で、「ソーシャル・サポート」と「時期」及び「情動調整行動」の3つの視点を加味した2段階・4局面からなる「スポーツ傷害受容のプロセスモデル」を提示した。そして、第1段階では、情緒的安定性の回復に焦点をおいた「情緒的支援」が有効であり、第2段階では、時間的展望の回復に焦点をおいた「見通し支援」が有効であることを指摘した。最後に、本論文の問題点と今後の課題に言及した。

以上の内容から、本論文の意義は以下のようにまとめられる。

- 1) スポーツ傷害受容の定義と構造を明確にし、スポーツ傷害受容の程度を測定する尺度を作成したこと。
- 2) スポーツ傷害受容はリハビリテーションのみならず、競技復帰後の適応状態にも影響し、負傷アスリートの心理支援における中核的要因になることを示したこと。
- 3) 情緒的安定性と時間的展望がスポーツ傷害受容を促進するというスポーツ傷害受容の心理プロセスを明らかにし、さらに、このプロセスにソーシャル・サポート、時期、負傷アスリートの情動調整行動が影響することを明らかにしたこと。
- 4) 研究結果（エビデンス）に基づいた負傷アスリートへの心理支援のあり方を示唆したこと。

一方、審査委員からは以下のような指摘や質問がなされた。

- 1) スポーツ傷害受容を、喪失した競技能力の受容という観点で捉えているが、負傷ア

別紙 1－2

論文審査の結果の要旨

スリートは競技に費やしてきた時間の喪失も体験しており、この点も加味して受容を捉えるべきではないか。

- 2) 感情や情動、情緒などの用語の使い分けが不明瞭であり、明確に定義して使い分けるべきではないか。
- 3) 傷害によるスポーツ停止日数が短い者と長い者を合わせて受容のプロセスを検討しているが、両者を分けて検討すべきではないか。また、スポーツ停止日数が短い者が多いが、そうした集団をもとに作成されたスポーツ傷害受容尺度は一般化が可能なのか。
- 4) 個々のスポーツ傷害発症から受容に至るまでの心理プロセスを、医療的回復や運動パフォーマンスの回復といった客観的事実との関連で検討する必要があるのではないか。
- 5) 性差について考慮、検討する必要はないのか。

こうした指摘や質問に対して、学位申請者は適切に回答し、問題点や今後の課題についても十分に認識していた。以上の結果、本論文は、負傷アスリートのスポーツ傷害受容や心理支援について新たな知見を提供し、当該研究分野の発展に大きく貢献するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。